

# 豫科練



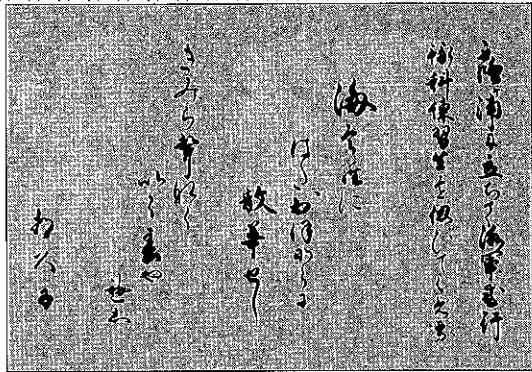
No.480 令和6年

1・2月号

○連載《シリーズ海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑》No.23…	2
○連載《シリーズ海軍飛行予科練習生遺稿》……………	3
○理事長より新年のご挨拶……………	4
○【常南電気鉄道】茨城の戦跡紹介⑧……………	5
○真珠湾攻撃50周年 たった一人の慰霊祭③……………	7
○沖縄神雷特攻記②……………	10
○彗星未だ還らず或る予科練出身搭乗員の軌跡①……………	13
○多田野語録 努力にまさる天才なし……………	18
○雄翔館見学者所感……………	19
○海原会寄付者芳名簿・お知らせ……………	21
○事務局日誌……………	22

公益  
財団法人

海原会



高松宮妃殿下御歌  
霞ヶ浦に立ちて海軍飛行  
予科練習生を偲びてよめる

海はらに

はたおほそらに

散華せし

きみら声なく

いく春やへし

この御歌は、高松宮喜久子妃殿下の御直筆で、有栖川流と申しあげ、妃殿下はその御宗家にあたられると承ります。

## 海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑 片浦基地の碑 No.23



太平洋戦争も末期の昭和二十年三月、薩摩半島の先端笠沙町片浦に、第三十二突撃隊に所属する第一二四震洋特別攻撃隊有田部隊（部隊長有田牧夫中尉・予兵3）が、来るべき本土決戦において、吹上浜上陸作戦を阻止する特攻部隊として、基地を設置した。

各地に、展開した震洋特別攻撃隊は、日本海軍最後の戦力として、日夜訓練に励んでいたが、米軍の本土上陸作戦が無いまま終戦を迎えて解散した。

終戦四日後の昭和二十年八月十九日、部隊に対する出撃待機命令が解除され、震洋艇起爆装置の信管取り外しが命じられ、基地隊員が、その作業中、突然爆発事故が発生して、八名が死亡した。（戦死と認定）

元隊員が、昭和四十年現地に「無名戦士」の小さな碑を立て供養した。これが新聞に報じられたのを機に、元隊員らが建立委員会を結成し、町当局や、地元有志の協力によって、戦死者の慰霊と祖国の永遠の平和を祈り、この碑を建立した。

- 所在地 鹿児島県川辺郡笠沙町片浦
- 管理 笠沙町社会福祉協議会
- 建立年月日 昭和五十六年八月十九日
- 慰霊祭 毎年八月十九日（祥月命日）
- 問合せ 建立委員会代表 原 昭宣氏

熊本県飽託郡北部町  
大字楠野一三七五  
（〇九六・二四五・〇一三〇）

# 海軍飛行豫科練習生

遺書 遺詠 遺稿 辞世

## 遺詠

◎山口 義郎 上飛曹（二十一歳） 昭和二十年一月八日 京都 乙飛十六期

増援神風特別攻撃隊八幡隊 天山 クラーク発進  
リングエン湾

吹雪吹く北の守りをになうわれ

散りて咲かさん山桜花

◎大久保 勲 一飛曹（三十一歳） 昭和二十年二月二十一日 茨城 丙十一期

神風特別攻撃隊第二御楯隊 彗星 八丈島発進  
硫黄島周辺の艦船

御いくさの行くてをはむ敵あらば

うちてしやまん生の限りは

# 賀 正

## 新年のご挨拶

公益財団法人海原会 理事長 安井 剛

明けましておめでとございます。

公益財団法人の事務局を阿見町に移転して、新しい体制での三回目の新年を迎える事となりました。

「海原会」の将来を見据えた将来体制と、それに基づいた中期計画により海原会の充実・運営を図って参りたいと考えています。

又、豫科練ゆかりの地「阿見町」の皆様との交流を、機会を求めて図っていくと共に、「海原会」をより良く知って頂くために引き続き広報活動に尽力して参りたいと考えています。

昨年五月に、「陸上自衛隊武器学校」及び「海上自衛隊下総教育航空群」のご支援を頂き、豫科練戦没者慰霊碑「二人像」前に於いて「第五十六回豫科練戦没者慰霊祭」を約三百名のご来賓と共に、一般公開にて滞りなく執り行う事が出来ました。

「海原会」としては、今後ともその活動目的である「慰霊顕彰」「史実伝承」活動の継続を、ご遺族及び豫科練同窓生を始めとする会員の皆様方、及び、「陸上自衛隊武器学校OB会」の皆様並びに地元の皆様方、更には、「海原会」にご理解・ご協力を頂いている方々のご支援・ご協力を得て、推し進めて参りたいと考えております。「海原会」会員の皆様方には、今後とも昨年引き続きご理解・ご支援・ご協力を賜りますように御願い申し上げますと共に、「龍年」のこの一年、会員皆様方の益々の多幸及びご発展をご祈念申し上げます、新しい年の始まりの御挨拶とさせていただきます。

令和六年 元旦

## 公益財団法人

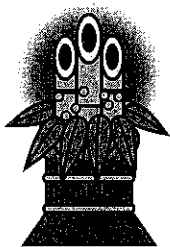
# 海原会

名譽会長	小林 和夫 (乙期)
名譽顧問	菅野 寛也 (二般)
顧問	池 太郎 (二般)
	六車 昌晃 (二般)
	宮本 忠明 (二般)
参与	行方 滋子 (二般)
理事長	安井 剛 (二般)
副理事長	星指 隆 (二般)
理事	平野陽一郎 (二般)
	篠田 輝男 (二般)
	山下 桂子 (二般)
	塚 純一 (二般)
	豊岡 昭 (甲期)
	原 雅英 (二般)
監事	久保山賞一 (甲期)
	津島 裕 (甲期)
	小野 昌美 (二般)
	明石 英次 (二般)
	湯原 弘 (二般)
	石引 大介 (二般)
	巻島 政美 (二般)
評議員	

## 公益財団法人

# 水交会

会長	杉本 正彦
副会長	佐賀 幾雄
理事長	河野 克俊
専務理事	村川 豊
事務局長	徳丸 伸一



# 茨城の戦跡紹介⑧

海原会参与

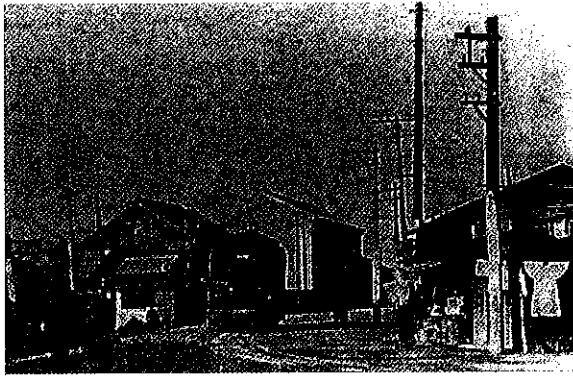
行方 滋子

今回は、「幻の鉄道」といわれた常南電気鉄道についてご紹介いたします。

常南電気鉄道は、当初、土浦と荒川沖、水海道（みつかいどう）を結ぶために計画されましたが、実際には土浦と阿見（あみ）間が阿見線として開業しましたが、のちに廃線となり、残された荒川沖、水海道への計画線も資金難のため頓挫。谷田部（やたべ）までの谷田部線として縮小されたものの未成に終わってしまったため、「幻の鉄道」といわれるのです。

## ○常南電車の概要

常南電車は、今から九十七年前に茨城県新治郡土浦町



（現・土浦市）の土浦駅と稲敷郡阿見村（現・阿見町）の阿見駅を旧国道一二五号線沿いに「チンチン」という音を鳴らしながら走っていた路面電車でした。  
この一両編成の路面電車は、マッチ箱といわれたくらい小さくて、オレンジ色をしたとてもかわいいう電車です。人々は「チンチン電車」と呼んでいました。

【常南電車】

土浦と阿見間の所要時間は約十五分、運賃は二十銭ぐらいで、国鉄運賃に比べるとかなり割高だったため、商人や軍人の利用が大半で、一般の利用客は比較的少なく徒歩で往来する人がたくさんいました。

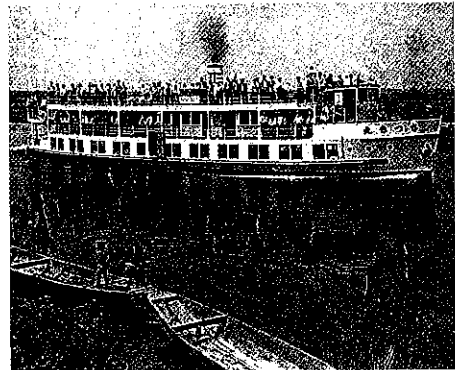
## ○航空隊の影響

大正十（一九二二）年に海軍の航空隊が開設されると、阿見村は「海軍の街」として大きく変わりました。

粗悪だった道路は、舗装（本県初の舗装道路）され、土浦自動車商会によるバスが阿見と木原線として開通、そして、同十二（一九二二）年にはアサヒ自動車会社の阿見飛行場行きが開通されました。

また、大正十三（一九二四）年には水郷汽船が開通し、同十五（一九二六）年には常南電車が土浦と阿見間に開通されたのでした。

【水郷汽船 さつき丸】



【常南電気鉄道開通記念】



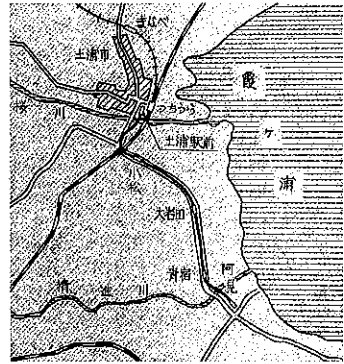
## ○創設の経緯

常南電気鉄道を企画したのは、茨城県新治郡柿岡町（現・石岡市）出身で、大正十年六月三日に北浦電機を起した市村貞造氏でした。彼

は、銚田電気を合併するなど電力事業に関係が深かったことから、その頃各地に続々と開業していた電気鉄道に着目、霞ヶ浦海軍航空隊の人員輸送を目的に土浦～阿見間に鉄道敷設を思い立ち、大正十年九月十五日に根崎～阿見間の特許を、大正十二年三月五日には谷田部～根崎～土浦間の免許を得て、大正十二年八月三十日に常南電気鉄道株式会社を設立し、本社を茨城県新治郡中家村（現・土浦市）に置いたのでした。

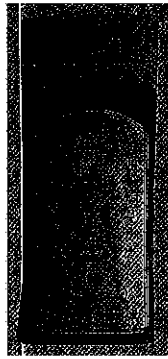
さらに、大正も終わりに近い十五（一九二六）年十月九日、根崎～阿見間四、一キロが開通し、昭和三（一九二八）年三月二十二日には土浦駅前～根崎間〇・五キロが開通、念願の土浦駅への進出を果たし、本社も茨城県稲敷郡阿見村青宿に移転されたのでした。

【常南電気鉄道路線略図】



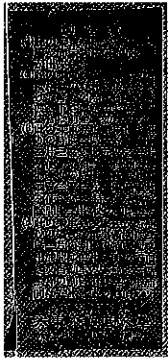
【海軍軍人回数乗車券】

（表）



【海軍軍人回数乗車券】

（裏）



○廃業

昭和初期の不況時代（昭和恐慌）から約十年間を細々と

切り抜けてきた常南電気鉄道も、バスの利用者が増えたことによる乗客の減少や資金面でバックアップをしていた十五銀行が他の銀行と合併したことにより支援が得られなくなったことなどから、昭和十三（一九三八）年二月二十八日限りで営業を廃止し、約十二年の短い歴史に幕を閉じたのでした。

○廃線後

昭和十三年三月三十日、常南電気鉄道株式会社はバス専用となり、社名も「常南自動車株式会社」と改称されました。

たった一台のバスで土浦～阿見間を運行していましたが、霞ヶ浦海軍航空隊（水上班）が拡張されることになり、人員輸送が激増、連日乗車しきれないほど利用者が殺到するようになりました。

もしあと一年、廃止が伸びていたら情勢が変化して、常南電車も戦後まで健在だった

かもしれないとか、あるいは谷田部まで延伸されていたかもしれないなど想像も膨らみ、とても複雑な気持ちになります。

廃止後の車両は、峡西電気鉄道（後の山梨交通電車線）及び秋保電機鉄道に譲渡されました。

○鉄道の面影

私は、陸上自衛隊武器学校で勤務しているため、旧国道一二五号線を通りますが、周りを見渡しても、残念ながら常南電気 鉄道の線路跡などの痕跡を見つけることはできません。

「幻の鉄道」といわれた常南電気鉄道、その面影を見ることはできませんが、廃線跡を辿りながら、当時に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

【参考文献】

◆鉄道ピクトリアル

（一九六五年二月号）

白土貞夫



◆ふるさとの想い出写真集  
明治・大正・昭和 土浦  
(国書刊行会)

◆茨城の民営鉄道史

中川浩一

◆阿見町史

◆インターネット

## 真珠湾攻撃五十周年

### たった一人の慰霊祭③

第四代理事長

菅野 寛也

平成四年十月十八日、土浦の「第二十六回予科練戦没者慰霊祭」(於 陸上自衛隊武器学校)にMr. FISKE (フィスクさん)ご夫妻が参加された。海軍飛行予科練習生出身の海原会会長、前田武さんは、真珠湾攻撃で戦艦W est Virginia (ウエストバージニア)に魚雷攻撃した九七艦攻の電信員でありフィスクさんは、その

攻撃された艦橋に居られた通信兵であった。

五十年後の慰霊祭で、フィスクさんが、日米両国の鎮魂曲を吹奏し「怨讐を超え平和を祈りましょう」と、前田会長と固い握手をされた。参列者に、深い感銘を与えた行事であった。

真珠湾攻撃から五十年、真の平和の為に、関係者の努力が実りつつある事を確信した。

そして平成五年は、実に忙しい年で、私の生涯でも「人生の凝縮」とも言うべき年である。

残念ながら、昨年より入院加療中であつた親父が、九十歳になつた直後、天寿を全うして、と言うべきか、力尽きて遂に五月十七日、昇天した。肉親を失つた悲しさと、また一人医師としての先輩を失つた淋しさを感じた。

悲しんでいる暇も無く、我が家では、アメリカに嫁ぐ次女の出発の直前だったので、

取敢えず、密葬を済ませ、次女の出国を見送つてから、本葬儀を執り行つた。松浦会長、西野先生も、有り難い弔事を饒下さり、人生最大の行事の一つを済ませて、今度はネクタイの黒を白に変えて、六月初旬、アメリカへ向かつた。

次女の fiancée (フィアンセ)はWEST POINT (ウエストポイント)の米陸軍士官学校卒業直後の将校で、半年前から予定されていた式を延期するのも失礼で、親父も可愛がつていた孫のことだから見守つてくれることと信じて、式に向かつた。

ミシガン湖の岸辺の教会で、日本と違って簡素な、そして厳粛な式であつた。四年前から留学していた娘であつたが、まさか、ウエストポイントの elite (エリート)と結婚するとは思つてもいなかったが、私が、静岡空襲の日米合同慰霊祭を主催し

たり、一緒にPEARL HARBOR (パールハーバー)へ参詣したりしたので何か感ずる所はあつたのかも知れない。ともあれ、「日米親善」を実行してくれた訳である。

そして早いもので、今年の夏(八月十五日)も、ワイキキでの灯笼流しの御通知を頂き、参加した。今年も、二回の家族ぐるみの外国旅行となつた。

昨年お世話になり、日本へも来られて、予科練(海原会)の慰霊祭にも参列された。フィスクさんとMr. JOHN F. DE VIRGILIO (ジョン・エフ・デ・ヴィルジョリオさん) (ARIZONA MEMORIALのMEMBER 《アリゾナメモリアル》のメンバー)が迎え下さり、昨年と同様ARIZONA (アリゾナ)とPUNCH BOWL (パンチボール)へ参詣した。

更にフィスクさんは夜の灯籠流しにも参列され、B-29搭乗員遺品の水筒を祭壇に捧げて、御一緒に焼香した。今や、この水筒は、一連のceremony(セレモニー)に欠かせないものとなり、フィスクさんが説明されると、見知らぬアメリカ人達が、一緒に祈禱するようになった。これは、もう一種の「神器」になった感である。

灯籠流しの直前にフィスクさんがパールハーバー近くのHICKAM(ヒツカム)飛行場へ案内して下さった。勿論、フィスクさんと御一緒だとgate(ゲート)もfree pass(フリーパス)である。日曜日なので、司令部の中には入れなかったが、建物の壁に、何か沢山の穴のような傷跡が見える。中には、「井」位の傷もある。paint(ペイント)は綺麗に塗られているのに、変だなと思っていたら、フィスクさんが、「あれが、十二月七

日の機銃掃射の弾痕だ」とのこと、「あの大きな弾痕は、紛れもなく、零戦の二十mmだ」と気がついた。

弾痕をそのまま「保存」しているのは日本人にとって、大変厳しい現実であるが、やはり、「歴史の一コマ」には違いない。

アリゾナメモリアルと同様、歴史の証人として後世に伝えられるべきものであるから、それによる教訓、反省を学ぶべきであろう。私が真珠湾へ慰霊に訪れる意義は、勿論、それが、問題だと考えている。

五十年前の戦争については、先に攻撃をしかけたのが日本であるが、それ迄に至る経過の中で、日本ばかりでなく、米国を中心とした世界の歴史に於いて、何回か戦争を避け得るchance(チャンス)はあったと思う。また世界の歴史の中では、日米戦争ばかりでなく、ごく些細な誤解や、無理解のために悲惨

な結末を招いた例は枚挙にいとまがないであろう。

しかし、そんなことを論ずる前に、真珠湾では先ず、哀悼の意を表すことが大事であろう。

そんな気持ちを理解されたフィスクさんが、「日本からのFriend(フレンド)」と色々な人に紹介してくれる。「何時もハワイに来る時は、この水筒を持って、皆に見せて欲しい」と、私の心を読んでくれる如く言われた。これは、私のLife work(ライフワーク)だと決心した。

帰国して、今度は静岡の日米合同慰霊祭の準備が大変であった。日本側、小山守一遺族会会長や、米大使館、米空軍と打ち合わせ、特に米国大使は新任のMONDALL(モンデール)さんなので「今迄の資料をFAXで送って欲しい」と連絡があった。弟が聖光学院の英語の教師なので、大使館との交渉も大助

かりだが、今年はヤケに台風が多くて、天候も気になる。天気だけはどうしようもないが、幸いにも、十月二日、今年の慰霊祭は雨に降られずに済んだ。思わず閉会の挨拶で、「これも神仏のお陰」と言ってしまった。

モンデール大使からも、大変丁寧なメッセージを頂いた。

小山遺族会会長も、「静岡の被災犠牲者の遺族の悲しみも、B-29の搭乗員遺族の思いと同じです」と述べられ、米軍の出席者も深くうなずいていた。

レセプションの後、帰り際に二十年來のアメリカ側のordinator(コーディネーター)、Mr. VOS S(ヴォスさん)が、「今年はずべて、順調であった」と喜んでいたが、やはり、天気は気になっていたらしい。

それから一週間後、零戦搭乗員会の吉田さん(甲飛十三期)から、「Mr. DE V



IRGILIO (デ・ヴィル  
ジーリオさん) が来日した  
が、静岡のスケジュールにつ  
いて相談したい」と連絡があ  
った。ハワイ訪問時にもお聞  
きしたが、十月十七日、海原  
会の慰霊祭(土浦)のゲスト  
として来日された訳である。

十九日(火)の予定とお聞き  
したが、「土浦で逢えるのだ  
から、その時に決定しましょ  
う」と言うことになった。

十六日(土)の前夜祭で久  
しぶりに再会、彼の予定変更  
のため十八日(月)来静とな  
った。十七日(日)の土浦の  
慰霊祭は雨のため、屋内での  
挙行となったが、彼のゲスト  
スピーチは流石に、ハワイ大  
学の歴史の教授だけあって格  
調の高い挨拶であった。「国  
のために戦死した英霊のため  
に、細川首相は、何故、公式  
参詣されないのでしょうか？」  
とか耳の痛い話もあったが、  
特に「世界の戦争の歴史の中  
で、女性の遺族の傷は、年月  
が経ってもダメージ

が大きく残っているもので  
す」と話された時は、遺族の  
方々をはじめ、皆深い感銘を  
受けた。最後に、「相互理  
解、お互いの立場を尊重する  
気持ちがあれば、戦争は避け  
られる筈です」と締めくくっ  
た。

直後のレセプションで、一  
人の女性がわざわざ来られ  
て、通訳して欲しいとのこ  
と、デ・ヴィルジーリオさん  
の話に大変感動した。私のフ  
ィアンセは加賀の搭乗員で、  
十二月八日の真珠湾攻撃に参  
加し、その後、南太平洋で戦  
死したが、貴方の言われた通  
り、心の傷の痛みは消えませ  
ん。今日は良いお話を有り難  
うございました」と涙を流し  
て話された。デ・ヴィルジー  
リオさんも大変感激して、そ  
のPILOT(パイロット)  
の氏名をお聞きしたら、「そ  
の人は加賀の艦爆のパイロッ  
トですね」と直ぐに聞きかえ  
された。彼は、真珠湾攻撃隊  
の氏名を全部知っているの

か?とびっくりした。\*  
「静岡は翌十八日に行きた  
い」とのことになり、これま  
た、大忙しとなった。十二時  
三十八分静岡着、弟と一緒に  
エスコートして、浅間神社山  
頂の世界平和観音像(静岡市  
戦災犠牲者慰霊碑)と、B-  
29墜落搭乗員の碑へ参詣し  
た。

「かねてから、B-29戦  
没者二十三名の遺族を探して  
いるのだが」と話したら、  
彼も努力してみると約束して  
くれた。「もし、判明したら  
是非、真の日米合同慰霊祭を  
行いたい」と言ったら勿論、  
賛成されて、「その時は御一  
緒に」と願っている。  
私の行動は、真珠湾の傷、  
日米双方の傷のoperat  
ion(オペレーション)は  
できないかも知れないが、傷  
に薬を塗る位の事はできるか  
も知れない、と思っている。  
先日の新聞に、同窓の大橋  
俊二君が裾野市長選に立候補  
するとの記事が出ていた。彼

のDollicy(ポリシー)  
がどんなものなのか?昔の彼  
とは、どんなに変わったかは  
わからないが、その意気や、  
結構!!  
少医は、病をなおし  
中医は、病人をなおし  
大医は、国をなおす  
と言う

彼は市政に、  
私は、国際親善、世界平和  
のために  
どちらが大物か、競争しよ  
う。

石塚重男 二飛曹、甲飛三  
期、操縦(九九艦爆)加賀第  
二中隊二十六小隊二番機。昭  
和十七年五月七日サンゴ海  
戦で被弾し、米艦ネオシヨ  
ーに体当り、戦死。

平成五年十月二十一日(学  
徒出陣五十周年の日)

続く

# 沖繩神雷特攻記

(2)

室原 知末

(大分県・特乙飛二期  
大正十五年生)

## 戦場到達三十分前

しかし、桜花攻撃の困難性は、雷撃の比ではない。昼間、堂々と編隊を組み、機内無線電話で交信しながら目標に向って進んでいくことは、三月二十一日の野中五郎少佐の悲運な行動でよく分かっていた。単機発進に改められたことは、命令の通りであった。

私の機は、もう変針点に近づいていた。渺茫たる洋上には島影一つ見えず、ただ蒼い海に染まったかのように空の青さが、水平線の区切りもつかないほどに見えるばかりであった。午前八時過ぎ、先発の僚機らしい黒点を約一万か

一万二千メートル前方に二機認めしたが、針路を東寄りにとっているらしく、左へそれてついに見失ってしまった。せつかく追いついたのに残念でならなかった。

午前八時二十分、変針点に到達したので、針路を東九十度にとった。すなわち、あと三十分すれば沖繩本島に到達する地点で、本島から西約六十マイルに当たる地点であった。全身が緊張して、上下、左右の見張りを一段と嚴重にした。いつ敵戦闘機が現れるか分からないからだ。約二トに近い桜花機を抱えた身重な一式陸攻は、ここで攻撃されたらひとたまりもない。何とかして目的地上空まで到達しなければならぬ。八時四十分から九時にかけて、爆戦隊が本島東方洋上に、敵邀撃戦闘機を引きつけるオトリ作戦を開始することになった。しかし、それは作戦が図に当たった時のことで、少しでも時間が食い違えば、敵機

は陸攻隊に殺到してくるだろう。私たちは不安であった。しかし、本島西方上空に到達する時間だけは、爆戦隊の突入時刻に合致させなければならぬ。

神に祈る、とはこのような時のことであろうと思った。弓矢八幡大菩薩、と心に念じながら、救命胴衣のひもに差している宇佐神宮の守護札をそっとなでてみたりした。

変針後間もなく、石渡正義上飛曹(乙飛十七期)は、まどろみから覚めて、航空時計を見ながら、指揮官席から甲斐機長と話をしていた。機的位置を確かめたものだと思ふ。離陸以来、指揮官席にすわり、終始窓によりかかった姿勢で腕を組み、目をつむっていた。出撃の際にもらった赤飯のカン詰めといなりずしの包みを膝のポケットに押し込んだままであった。私は離陸直後、昼食のいなりずしを食べてしまった。この期におよんでも食い気一方であった

私にくらべ、石渡兵曹はそいずれにも手をつけていなかった。

飛行帽の上から結んだ「神雷」のはち巻きの端を両わきに垂らし、ピンクのマフラーは顎をかかすほどに巻きつけ、左ほおの傷痕は、石渡兵曹のトレード・マークのように濃い眉毛と対照的な釣り合いを作っていた。左頬の傷は、いつごろ受けた傷かとうとう聞かずじま이었다が、空戦の際の流れ弾か、あるいは不時着の際受けたものに相違なかった。(遺族の話によれば、十九年二月の三重空での最後の面会時にはなかったそうである)

鹿屋基地野里の宿舎や周辺村落で、左頬に傷のあるピンクのマフラーをつけた桜花隊員をしばしば見受けたが、昨夜、搭乗員名が発表されて初めて顔を合わせた時、あつ、あの人物かと私は思い至ったのであった。ともあれ、生死をともしにする搭乗員は、空中

では先輩後輩の区別もなく、階級の上下もない同僚であつて、和気あいあいたる裸のふれ合いがあるのみだつた。

変針から五分経つたころ、石渡兵曹は子飛行機の「桜花」機へ移乗する準備にかかつた。まだ少し早いのではと思つていると、指揮官席を離れ操縦席の後ろへきて、

「ではそろそろあちらへ移りますから、よろしくお願ひいたします。お世話になりました。では往きます」と言葉短に挨拶をかわした。私は石渡兵曹と、目標の位置はブザーで送るが、符号は打ち合わせどおり、左前方の時は「モ・イ」、右前方の時は「モ・タ」とし、「桜花」発進は「ク」の長音が終わった直後に発射装置の電鍵を押して母機から切り離すからと、再確認の打ち合わせを行った。石渡兵曹は、あらかじめ作戦司令のあつたことであり、軽くななずきながら私の言葉を聞いていたが、了解の合図をし

てふたたび「では往きます」と、右手を挙げた。別れの挨拶であつた。私は胸がつまつた。飛長の私があわてて右手を挙げながら、石渡兵曹の顔が笑つていゝのにぶつかると、正視できないくらいにの神々しい気迫に圧倒されるのをおぼえた。

「では往きます」といった言葉の響きは、三十数年を経た現在でも、私の耳底にしんと残つていて、いつでも当時の状況を再現することができる。ふつう、「行つてきます」という言葉に始まり、「ただ今帰りました」で終わるのが挨拶の言葉だが、この場合は、永遠に帰つてくることのない出発であつた。もちろん、それは生きて帰る可能性がまったくないのだから、百パーセントの死出の旅であつた。まさに生きていゝ神ものか、仏陀のようにおごそかなものに私の目には映つた。「がんばつて下さい」私はつぶやいたが、それは相手には

聞こえない心の叫びであつた。

私は副操縦席を立つて、機体の中央部、主翼のつけ根に当たるところに子飛行機の「桜花」へ通ずる筒型になつた通路があり、そこで「桜花」へ乗り込もうとしている石渡兵曹のそばへ行つて手伝つた。一部がガラス張りになつていゝ蓋を引き上げると、梯子を伝わつて子飛行機の操縦席へつながつていゝ。一段一段、「桜花」へ沈んでいく飛行帽を、私は穴のあくほど凝視してゐた。操縦席についた石渡兵曹は、上を見上げるでもなく座席に腰を沈めると、操縦の姿勢をとり操縦桿を握つた。右手のたくましい拳が、飛行手袋の中で握りしめられていゝのだからと思ひながら、私は「石渡兵曹、座席はいかがですか」と、大声でいつたが、それは爆音に消されて石渡兵曹の耳には届かなかつたようである。

午前八時二十五分のことで

あつた。

### 桜花炸裂

八時五十分、高度三千二百メートル。ついに沖繩本島が正面に姿を現し、右手に伊江島のくつきりした島影を認め、左手に伊平屋島望む位置まで到達したのである。あとわずかである。ジリジリと迫つて来る興奮と不安と、目標の選定と成功を期待する複雑な心理状態のなかで、私の視線はめまぐるしく変わった。八方に視線と神経をくばつていゝ私の形相は、すさまじいばかりであつた。後日、山崎操縦員が私に語つた。食われてたまるか、私はそのことばどおり心の中で考えてゐた。同時に、石渡兵曹の死をむだにさせてはならぬと、神に祈る気持ちで心の中で念じた。

秒刻みに時間は過ぎていく。一分も経つただらうか。私たちの眼下に、果てしなく

拡がる南溟の蒼海原に、いる、いる——七十隻に近い大艦艇が三群に分かれて遊弋しているのが見えた。目標はいずれに。伊江島近くにいる船か。左前方に見える船団から一隻の大型艦が伊江島に向って、目に痛いくらいの航跡をひいて航行しているのが見えた。これだ——と思った瞬間、甲斐機長も左前方を指差した。目標は決まった。私は「左前方の目標、大型艦に向って桜花を発進する」という「モ・イ」のブザーを押しした。石渡兵曹は「了解」の信号を送ってきた。「発進用意」の「ハ」を送ると、陸攻機は機首を下げた。発進時の機速を増すためである。「了解」のブザーが鳴った。ところが、「桜花発進」のブザーを押そうとしたそのとき、山崎操縦員が私を制止した。彼は自分の席の真下を指差ししながら、「この下にいる」と手真似して見せた。私は左席だからその確認はできない。

甲斐機長が私のかわりに指揮官席のほうに身を寄せて確認した。そして甲斐機長は私の耳もとでどなった。「室さんよ、右前方の大型艦に発射するぞ。石渡兵曹に目標変更を伝えなおせ」私はとつさに「アヤマリナオシダ」の消符号を押した。「ト・ツー」と石渡兵曹からの応答。「目標、右前方の大型艦」「発進用意」と続けざまに信号を送った。秒刻を争う戦場のことである。落ち着いた「了解」の信号を確かめると、私はこの世で一番いやな信号を送らなければならない立場にあった。いやでも最後の信号を送ったら、操縦桿の中ほどについている桜花発進用の電鍵をたたかなければならないのだ。

私は静かに、ゆっくりと「ク信号」を送り始めた。「ト・ト・ト・ツー」の最後の長音を、倍も三倍も長く押していたい気持だった。いや、このまま指を離したくない気持だった。歯を食いしばって少し長めの長音符を押ししたが、そう長くは押ししてはいられなかった。石渡兵曹の発進を妨げるからである。子機では、長音の終るのを待って、発進の態勢をとっているのだった。

長音符を終わった次の瞬間、私は思いきって母子を切り離す電鍵をたたいた。(石渡兵曹、すみません。私も命令で押ししているのです。堪忍してください。お元気で)

「成功を祈ります」私は叫んだが、しかしそれはもう言葉になっただけだった。

離陸後、二時間四十分の同乗であった。石渡兵曹の出身地も聞かず、個人的な友情を深める時間もなかったが、私の彼に対する思いが通じたかどうか、若い肉体が一瞬にして散華する永遠の訣別の時であった。

母機は押し上げられるように軽くなって、宙に浮いた。

高度計は二千九百を示していた。陸攻機は左旋回しながら、戦果確認の位置をとった。付近には今しがた発進していた「桜花」機の噴射した茶褐色の煙が浮いて見えるばかりで、子機「桜花」の位置さえ目が届かず、ただ一直線に降下しているロケット噴射の煙が見えた。機種は自然に北東に向っていた。やがて尾部の銃座にいた林二飛曹(攻撃員、特乙飛一期)から「やったぞう」の合図を稲葉二飛曹(電探員、特乙飛一期)が受けて、スポンソンの位置から機長へ伝えた。私、山崎兵曹、搭乗員の木口一整曹も、とびあがるようにしてこの快拳を喜んだ。午前八時五十五分のことであった。

しかし喜んでばかりはいられなかった。私はプロペラのピッチレバーを、ロー一杯に引き、緊結螺を固く締めた。つぎにスロットルレバーを全開にして、これも動かぬように固く締めた。山崎兵曹から

制止されたが、戦場離脱を終わるまで、グラマンに追われないように一式陸攻の最高の性能で飛行することを試みた。

高角砲の炸裂弾であるうか、綿のかたまりをまき散らしたようなものが、機の下方に点々と見えたが、山崎兵曹はそれを無視して高度を上げ下げしながら、不規則な避弾運動をくり返した。このとき甲斐機長は、杉山電信員に命じて「我レ戦艦若シクハ大型艦ヲ轟沈ス、〇八五五、ハ」の電信を基地に打電していたのである。(ハは当日の機番号である)

まだ安心は禁物であった。沖繩本島東方洋上に引きつけられた遊撃戦闘機が、西方洋上の異変を察知して戦況確認に飛来したら、轟沈された味方艦艇の渦紋と煙を見て、必ずレーダーを駆使して追跡してくるにちがいない。そのとき、林兵曹が後方に敵機影を発見した。間髪をおかず甲斐

機長は山崎兵曹に、雲に入れと指示、同時に無謀にも「我レ戦闘機六機ノ追跡ヲ受ク、〇九〇五、ハ」を打電させたというのである。

万事休すかと私は思った。いかに身軽になった一式陸攻とはいえ、グラマンの追撃には勝てない。しかし、そう思いながらも、最後まで捨てた気持はなかった。

こんどは、上空に見える雲層めがけて上昇飛行に移った。人間と機体が一心になって、戦場離脱に奔命の努力を傾けた。速度計は規定をこえて、百五十から百六十を示している。が、ひどくのろく感じられる。競馬の騎手が馬の尻に鞭をあてるように、私も飛行機の尻をたたきたい気持ちだった。

雲中飛行五分。生きようという私たちのすさまじい執念が、私たちに生を与えたのである。ついに私たちはグラマンをふり切って、鹿屋基地へと一路帰投のコースを列島沿

いに飛ぶことができた。開間岳がふたたび見えてきたとき、私は信じられない思いで自分のほおをつねった。間もなく私たち七名は生きて鹿屋上空を旋回していた。

そして午前十一時、約五時間の飛行と任務をおえて鹿屋基地に無事着陸したのであった。

私たちの眼の前で、「一人一艦刺し違え」の壮烈な散華をとげられた海軍上等飛行兵曹、石渡正義氏は、当時二十歳、独身、千葉県印旛郡和田村高崎の出身である。彼の勲功は永遠に顕彰され、連合艦隊全軍に布告されて二階級特進となり、海軍少尉に任ぜられ、靖国の神と祀られた。

新風特別攻撃隊神雷部隊、桜花隊所属、菊水五号作戦参加。戦果、戦艦もしくは大型艦を轟沈す。戒名、沖天院義烈正忠居士。

この日、天候晴れ、雲量三、雲高三千八百メートル、風向北北西、風速十二メートル

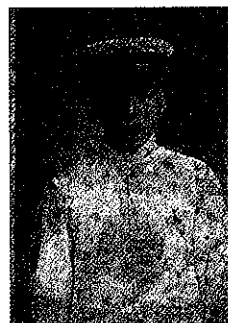
ル、視界一万メートル。完

## 彗星未だ還らず

或る予科練出身

搭乗員の軌跡①

佐藤 剛



昭和16年10月  
下士官任官時

## 序文

私の母の兄である坂田清一は大正十二年七月十七日に生を受け、昭和十三年六月一日に海軍飛行予科練習生(通称予科練)に採用され、昭和二十年七月二十六日に戦死した。二十二年の生涯であった。

## 第一章 予科練時代

(海軍飛行予科練習生)

県からは五名が合格した。

私が幼少の頃、母や祖父父母から伯父についての思い出話を度々聞かされていたが、予科練入隊後の戦歴については親族一同誰も知らず、いつの日か調査した結果を親族や私の子供、孫に伝えたいという思いがあった。

今年(昭和十一年)の生誕百年の節目の年であり、私も今年古希を迎え、未だ氣力が衰えないうちにこれ迄少しづつ調査し知り得た伯父の足跡について纏めたものを遺したいと思いが強くなった。

そのことで青春の全てを戦争に捧げ、国難に殉じた伯父への供養になれば幸甚に思う。

表題については、伯父の戦死状況を伝える手紙の中で、伯父の搭乗機「彗星」の帰還を待ち侘びていた記述があったことから、「彗星未だ還らず」とした。

令和五年七月吉日 記

### 【生い立ちと予科練入隊】

坂田清一は大正十二年七月十二日、新潟県北蒲原郡新発田町新築地一―七三番地(現在の新発田市西園町一丁目辺り)に六人弟妹の長男として生を受けた。稼業は主に野菜の種の行商を行い、農閑期には長靴の修理等で生計を立てていた。

### 【予科練とは】

昭和四年十二月、海軍省令により海軍予科練習生の制度が設けられた。将来の航空特務士官の養成を目的としたもので応募資格は高等小学校卒業で満十四歳以上二十歳未満で、教育機関は三年(後に短縮)、その後一年間の飛行戦技教育が行われた。

尚、昭和十一年十二月、名称は「予科練習生」から「飛行予科練習生」へと改称された。

母が生前語っていたことによると、伯父は学校から帰ると稼業を手伝い、勉学も体育も極めて優秀であったらしい。尋常小学校高等科を卒業し第九期乙種予科練飛行練習生を受験し合格した。試験内容は学科試験(算数・国語)、これに合格すると面接、身体検査と進み、これに合格すると更に五日に亘る適性検査があり最終の合否が決まった。倍率は諸説あるが、七十倍以上であったと言われている。採用人数は二百名であり新潟

昭和十二年に更なる幹部搭乗員育成の為、旧制中学校四学年一学期終了以上(昭和十八年十二期生より三学年終了程度と引き下げられた)の学力を有し、年齢は満十六歳以上二十歳未満の志願者から甲種飛行予科練習生(甲飛)制度を設け、従来の練習生は乙種飛行予科練習生(乙飛)と改められた。また昭和十五年九月、海軍の下士官兵から隊

内選抜制度として従来から存在した操縦練習生(操練)・偵察練習生(偵練)の制度を、丙種予科練習生(丙飛)に変更した。更に乙種予科練のうち年長者や適性のある者に対し期間を短縮して教育する目的として特別乙種予科練制度(特乙)を設けた。

このように学歴や出身区分により多様な制度変遷を辿ったが、甲種予科練習生の導入以来、甲、乙、丙という優劣を表す名前に変更したことと、昇進の速度に差が見られたこともあり、特に甲飛と乙飛の練習生間に対立が生まれた。乙飛練習生の予科練の元祖は我々だという誇りと、予科練制度が発足する前の操練、偵練をルーツに持つ丙飛練習生の自負が根底にあったと思われる。

この甲飛と乙飛の軋轢は実施部隊に於いても温度差はあり続いたようである。

また海軍兵学校卒のエリート士官への飛行教育は予科練



とは別に飛行学生制度があった。一般に十代後半から飛行教育を受ける予科練出身者が技量が上であったと言われている。

予科練制度発足前の操縦練習生過程を卒業したパイロットには名人級が多く日本を代表する撃墜王には操練出身者が多い。但し予科練出身者にも撃墜王は多く、日本一の撃墜王と呼ばれる西沢広義（戦死後中尉）は乙飛七期出身であった。また乙飛九期出身の戦闘機パイロットの中にも幾人かのエース（五機以上の撃墜者）がいたが、連戦で酷使され大半が戦死した。

### 【予科練の教育内容】

乙種予科練の場合、普通学十二科目、（歴史、地理、国語、数学、理化学、英語等）、軍事学九科目（運用術、航海術、砲術、水雷術、通信術、航空術等）、体育（体操、武技、ラグビー、遠泳、短艇訓練等）その他精神教育も行

なわれた。普通学については大体の目安を旧制中学卒業程度におき、特に数学と理化学は旧制高等学校初級程度にあたる高い水準であったと言われている。教育期間は当初の三年程度から漸次短縮され、終戦直前には一年八ヶ月となった。伯父の在籍した九期は二年六ヶ月であった。

甲飛の場合、当初の一年二ヶ月から終戦前には六ヶ月に短縮された。予科練の教育は教員や上級者の常に懲罰としての暴力的制裁を伴い、予科練習生はひたすら耐え忍んだと多くの回顧録に記載されている。

（注）当時の義務教育は尋常小学校の六年間であり、小学校卒業後二年間の高等科（現在の中学校二年生）卒業が乙種予科練の採用条件であった。尚、昭和十六年四月の国民学校令の施行により尋常小学校は国民学校初等科（修行年限六年間）、高等小学校を国民学校高等科（修行年限二年間）とすることとなった。その後義務教育を八年間とすることも検討されたが実施はされなかった。

（注）旧制中学校は小学校卒業後の進学コースであり、経済的に余裕がある家庭の、成績優秀な少年が進学した。卒業後は海軍兵学校や陸軍士官学校への受験資格があり、中学校四年一学期を終了すると甲種予科練習生の受験資格が与えられた。

### 【乙種九期予科練習生とは】

平成四年十一月に国書刊行会が出版した「海軍予科練習生」では乙飛九期生について次のように記載されている。要約と抜粋を以下に記す。

第九期乙種飛行予科練習生（乙飛九期）は、支那事変勃発二年目に当たる昭和十三年初頭、大空の護りを志願した多くの少年達が受験し、二百名の合格者が六月一日に横須賀海軍航空隊に入隊し、海軍軍人の第一歩を記した。

乙飛九期生が入隊した年は、「国家総動員法」が交付施行され、海軍航空隊は急速に増強が図られ、中国大陸での海軍航空隊の活躍が連日のように喧伝されていた。

予科練教程第二学年に入り、適性検査の結果、操縦専修者と偵察専修者に分けられ教育が行われ、昭和十五年六月一日附けで海軍一等航空兵（後の飛行兵長）に進級した。

昭和十五年十一月三十日、予科練習生教程を卒業した一九四名（六名は病気等の理由により次期回し又は疾免）は、十二月一日附けで第十期飛行術（操縦・偵察専修）練習生を命ぜられ、次の練習航空隊に分かれ飛練教程に入った。

操縦練習者

筑波空 矢田部空 八四名  
偵察練習者

鈴鹿空

一一〇名

昭和十六年五月三十一日、六ヶ月の飛練教程を卒業し、六月一日、操縦練習者は各機種別に分かれて次の練習航空隊に入隊して実用機教程に入った。

艦戦（艦上戦闘機） 大分空  
艦爆・艦攻（艦上爆撃機） 艦

上攻撃機) 宇佐空、大分空

陸攻(陸上攻撃機) 木更津空  
水上機(水上偵察機・飛行艇)

博多空

また偵察練習生は博多空、大村空、宇佐空に分かれて実用機教程に入った。

実用機教程は十月三十一日に終了し、教育終了時に海軍三等飛行兵曹(後の二等飛行兵曹)に任官した。

乙飛九期生は太平洋戦争開戦直前に各航空隊や母艦部隊に配属され、開戦に備え猛訓練で鍛えられた。海戦壁頭のハワイ真珠湾攻撃の母艦飛行隊には、乙飛九期生のうち六名が水平爆撃隊「九七艦攻」の電信員として参加し、歴史に名を刻んだ。

乙飛九期出身者は緒戦期から各基地航空隊や母艦航空隊に配属され活躍し、昭和十七年十月一日に海軍一等飛行兵曹、昭和十八年十月一日には上等飛行兵曹に進級した。この間数々の航空消耗戦におい

て飛行隊の中堅隊員として最も酷使され、上等飛行兵曹に進級した頃には、同期生の数はめっきり減っていた。

その後の台湾沖航空戦、比島沖海戦、最後の特攻作戦の頃には、乙飛九期生の名は搭乗配置にはほとんど見られな

いまでに減少していた。昭和二十年五月一日附で海軍飛行兵曹長(准士官)に任官

した頃には、海軍航空隊の至宝といわれ、飛行時間の短い練度不足な後輩搭乗員の先頭に立って奮戦していた。

横須賀海軍航空隊の隊門を潜った二〇〇名の同期生は、一七五名が戦死し、終戦時には僅か二十五名が残っただけで、その殆どは戦傷病を受けたために生き残り得たもので、五体満足の状態は数える程しかないなかった。実に八十七・五%もの戦死者率で、乙飛全期中最高の戦死者率であった。これは乙飛九期生が海

戦劈頭からいかに酷使された期であることを物語るもので

あった。

(注) 艦戦(艦上戦闘機の略称)

航空母艦(空母)に搭載して運用する航空機。九六艦戦(九六式艦上戦闘機)や零戦(零式艦上戦闘機)が該当する。単座機。陸上基地から発進する戦闘機は局地戦闘機と呼ばれた。紫電、紫電改、雷電等が該当

(注) 艦爆(艦上爆撃機の略称)

航空母艦(空母)に搭載して運用する急降下爆撃機。九九艦爆(九九式艦上爆撃機) 彗星、流星が該当。二座機。

(注) 艦攻(艦上攻撃機の略称)

航空母艦(空母)に搭載して運用する攻撃機。雷撃(低空から航空魚雷で攻撃)や高空から水平爆撃を行う。九七艦攻(九七式艦上攻撃機)や天山が該当。三座機。

(注) 陸攻(陸上攻撃機の略称)

陸上基地から発進し雷撃や水平爆撃を行う。多座機。

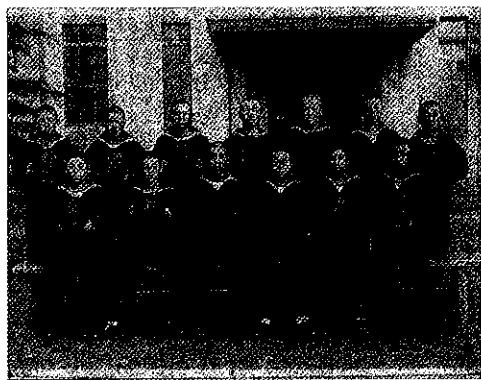
(注) 水上機 海面から離着水ができる航空機。水上戦闘機、偵察機、観測機、飛行艇等があり用途は多岐に亘った。

(注) 母艦航空隊

空母からの発着艦には高度な技量が必要のため母艦搭乗員に任命されることは大変な名誉とされた。

※「(注) 乙種飛行予科練習生出身の戦死者・戦死率」(二七ページ)

※「(注) 甲種飛行予科練習生出身の戦死者・戦死率」(二七ページ)



入隊時、同班の同期生。後列左から三人目が伯父。二名除き全員戦死。

続く

## (注) 乙種飛行予科練習生出身の戦死者・戦死率

期(入校年月)	戦死者	採用者数	戦死率(%)
1(昭和5年5月)	49	79	62.02
2(昭和6年6月)	65	128	50.78
3(昭和7年6月)	105	127	82.68
4(昭和8年5月)	96	139	54.50
5(昭和9年6月)	109	200	70.06
6(昭和10年6月)	125	184	67.93
7(昭和11年6月)	167	204	81.86
8(昭和12年6月)	166	218	76.15
9(昭和13年6月)	175	200	87.50
10(昭和13年10月)	183	240	76.25
11(昭和15年6月)	293	393	74.55
12(昭和15年12月)	282	370	76.22
13(昭和16年6月)	227	294	76.19
14(昭和16年8月)	228	298	76.51
15(昭和16年12月)	447	630	72.10
16(昭和17年5月)	834	1237	67.42
17(昭和17年12月)	547	1209	45.24
18(昭和18年5月)	405	1480	27.36

## 19期～24期省略

## (注) 甲種飛行予科練習生出身の戦死者・戦死率

期(入校年月)	戦死者	採用者数	戦死率(%)
1(昭和12年9月)	182	250	72.80
2(昭和13年4月)	187	250	74.80
3(昭和13年10月)	223	260	85.77
4(昭和14年4月)	233	264	88.26
5(昭和14年10月)	215	258	83.33
6(昭和15年4月)	220	267	82.40
7(昭和15年10月)	261	323	80.80
8(昭和16年4月)	333	455	73.19
9(昭和16年10月)	621	841	73.84
10(昭和17年4月)	777	1097	70.83
11(昭和17年10月)	733	1191	61.54
12(昭和18年4.6.8月)	861	3215	26.78

## 13期～16期省略

19期から24期にかけては合計79420名を採用し戦死者は493名、戦死率は0.63%であった。この頃の入隊者は教育資材の逼迫により、卒業後の搭乗員としての訓練が実質不可能となり、一部は回天(人間魚雷)、震洋(水上特攻艇)、伏竜(人間機雷)等の水上・水中特攻兵器操縦員となり、多くは整備、通信、陸戦要員に回され大空へ羽ばたく夢が絶たれた。尚、予科練教育は昭和20年6月以降に中止となった。

甲種4期生は予科練入隊者のうち最高の戦死率となった。13期から16期にかけては合計137953名を採用し戦死者は1934名、戦死率は1.40%であった。13期以降の入隊者は乙種予科練習生と同様の経過を辿り航空機搭乗員としての訓練を受けた者はごく僅かであった。尚、最初の神風特攻隊員には甲種10期生の中から多くが選出された。また丙種予科練習生、乙種(特)予科練習生については入隊絶対数は少ないが、昭和18年以降の戦死者は激減している。

努力にまさる  
天才なし

特別会員

多田野 弘

今回のテーマは、努力が天才よりまさることを示している。たとえ、素晴らしい才能があっても努力なしでは顕現できない。努力が大事なことは周知の事実だが、心身の苦痛を伴い実行がむづかしい。しかし、苦痛なしに努力できる方法がある。端的にいえば、努力することに喜びや気持ちよさをつくることである。「好きこそ物の上手なれ」の言葉にも通じる。努力が楽しみになれば苦痛ではなく喜びとなる。だが、どうして苦しみ喜びになるのだろうか。

苦痛を耐え忍ぶのではなく、楽しみながら継続するならば朝の洗面のように習慣となる。世の中に「意志が強い」と自

覚する人は少なく、「なんて意志が弱いのだろう」と自省している人が多い。私たちは何か良い習慣を身につけたい、あるいは悪習慣を止めたいと相当な決心をして取り組んでも、いつの間にか三日坊主の尻すばみになっている。それを何とかしようと思えば、結果は元の木阿弥になる。

これは出発点の考え方が誤っているからではないだろうか。肉体を鍛えるのと同様に、弱い意志力を叩いて鍛えればモット強くなると思うところに大きな錯誤がある。肉体があるように意志という形のものがあるわけではないから、肉体を鍛えるように弱い意志を鞭打ち鍛えることは、本来できない相談である。

問題は「意志や意欲」が自分のどこから発しているかに関係しているように思う。つまり、その出場所如何によって「三日坊主」になるか「や

り通す」かとなり、それを「意志が弱い、強い」と言っているだけである。出場所は二つあって、「心」から出る意思は弱く、「魂」から出る意志は強いといえる。ところが、私たちは自分が意識できる「心」が、精神作用の全てと思いついて、「魂」なるものの存在をアタマから否定してしまっているが、心と魂は別ものなのである。

意志の弱さは「心が魂にそむく」ことに起因するといえる。なぜならば、心はとかく末梢的な、五官の感覚を喜ばせる快楽を求めるが、魂の方は、もっと次元の深い、本当に自分のためになる快楽を求める。それゆえに、五官にとつては苦しく、心が喜ばないことを、魂は快楽とすることがある。味覚を例にとれば、心は舌の快楽を求め、飲み過ぎ、食べ過ぎ、美食に陥って健康を損ねることがあるが、魂は逆に粗食や節制を、必要となれば断食さえも快楽と

する。

心が澄んで五官の欲望に流されず、虚心、無心になれる人は好奇心に溢れ、魂の命令に忠実に従うことができる。己の人である。だから意志の強弱というのは、魂の命令に従うか、心の欲することに従うかによって決まるといえる。努力、忍耐、克己という言葉から、苦痛を連想するか、それとも快さの方を意識するかである。前者の人は、心の欲望が強く、忍耐、克己に苦痛を連想し「楽しくない」ので努力が続かない。後者の人は、忍耐、克己を魂の喜びと感じられるので、「楽しみながら」努力できるのではないだろうか。

楽しくないことは長続きしない。例えば、私はアラームなしの5時起床を、何十年も続けており、元日の海での寒中水泳を九十三歳まで四十九年間続けてきたことにも見られる。人から「意志の強い人

「だなあ」と感心される。だが、私はこれを楽しんでやってきた。毎朝五時起床も、辛さをこらえ、無理に自分に鞭打ってやっているのであれば、一ヶ月も続かなかつただろう。私は、早起きすることが「気持ちいい」から習慣となり、今もそうするのが当たり前になっている。

楽しくないことは長続きしないが、苦痛が快樂になれば続けずにはいられない。そうした努力が続くと、習慣がつくられ、よき習慣は期せずして人格を形成する。人格は、環境を変えるとともに運命を変え、素晴らしい人生を創造せずにはいない。まさに「努力にまさる天才なし」である。

続く

## 雄翔館見学者所感

この雄翔館に来たのは、二回目になります。やはり、一

回目と同様に戦争は絶対にしてはいけないものだと感じられました。特に、今、現在ウクライナとロシアで戦争が起きていて、ニュースなどで見ると、あまり身近に感じられないことも少しありますが、雄翔館に来て、色々なものを見ると、「私たちが生きている時代に戦争が起きています」と、よりもつと身近に感じられるものがありました。日本のために戦ってくれた人がいるからこそ私たちは、今、学校へ行けて、友達と遊ぶことが出来ているんだと改めて実感できました。私は、今、部活動に全力で取り組んでいます。全力で取り組めることを「当たり前」だと思わず、色々な方に感謝をしながら何事にも全力で頑張っていきたいなと思います。

令和五年四月

つくば市 遠藤様（学生）

昨年の九月頃に来館させていだいた者です。あれから半年以上が経ち、今回は私の

祖父母と共に来させていただきました。やはり、何度来ても学べるものは多いなというのが率直な感想です。私は、今年の春から高校二年生になります。そして、社会で世界史を選択します。その理由は、一度世界という視点から戦争を読んでいく必要があると思ったからです。ここに来て、日本側からの戦争を読み解いてきました。私は戦争中の世界を知りません。そして、海外の方々がどのようにこの戦争を思っているのかということも知りません。今からは世界と協力していかなければならない時代です。これから学習していく上で、ここで学んだことを生かして、世界の理解と紐付けていきたいと思

いきました。そして、間違った事実が広まることのないように、戦没者の方々の為にも学びを深めていけたら幸いです。

令和五年四月

つくば市 遠藤様（学生）

今の平和な日本があるのも

当時若かった先人達のお陰であります。日本人として日本に生まれて良かったと思うのと、大和魂は私の誇りです。先人達のお陰様をもって深く感動しました。ありがとうございます。

一人でも多くの人に見学してもらいたい。

令和五年四月

鹿嶋市

鈴木様

ここへ来て見学すると、いつも軟弱な自分が恥ずかしくなります。自分の命よりも大切な事に全てを捧げて、故国のため、家族のために全てを捧げてきた特攻隊員達！

彼らは、限りなく純粹で美しい！特に玄関に飾られている特攻前の四人の若者達の笑顔には心を奪われ、涙さえ出ます。

死を直前にして、仲間通し笑顔で……。純粹で、清らかで、美しい姿です。今の若者、中年達、もちろん自分を含めて、彼らを思えば恥ずかしい限りです。

私の父も、この土浦予科練出身でした。出撃前に終戦となつてしまい、父からたまに話を聞いていました。この土浦予科練の事は、訪れて良かったです。当時の彼らを思えば、仕事上や人間関係の悩み等、吹っ飛んでしまいます！「バカヤロー」と怒鳴られます！

令和五年四月

東京都

諸井様

初めて雄翔館を見学しました。私は、今年で二十三歳になります。厳しい訓練生活をを行い、日本の為に戦ってくれた予科練生を思うと、今の自分には何ができるのだろうと深く考えさせられます。今の自分が安全に生きている。日本が安全な国で過ごしやすくなっているのは、自らの命を犠牲にして戦ってくれた人たちが居るからこそです。日頃から、予科練生や戦争で亡くなった人たちを忘れずに、まっとうに生きていくこと、そ

れこそが今の私にできることだと思えました。

令和五年四月

土浦市

コカゴ様

たくさんの方々が散った空は、今では静かに雲が漂うばかり…。

多くの犠牲の上に成り立つ平和をつないでいかなばと改めて思いました。

管理、大変と思いますが、未来の担い手に語り継がれていきますように。

令和五年四月

市川市

氷室様

こうやって見てみると、本当にたくさんの方が日本のために亡くなっていったんだなと実感しました。

いろんな人の話を見ていると、悲しくなりました…。

戦争がどうして駄目なのかを、よく考えてみたいと思います。そして、このようなことにもう二度となつてほしくないです。

令和五年四月

市川市

石川様

昨年夏、平和記念館に来たら、設備の為、こちらへは初めてのお来館です。偶然TV放映で「阿見町でのことは戦後に発表された。」と仰って、遺族の方々が雄翔館を建設されたと聞きました。

父がフイリピンレイテ島で

戦火の中、三千人の内生き残った三人の中にいて、いつもお酒を飲むと「大日本帝国バンザイ」と涙していました。

「ジャングルに残していった戦友達の顔、声がいつも聞こえる…」いつもそんな話をしてくれるのが鬱陶しかったです。

たですが、今になるとゆっくり話を聞いてあげれば良かったと思います。日本高度成長になると痛ましい出来事(戦争)を忘れてました。

令和五年四月

大阪府

河見様

とても充実した内容で色々

な想いで展示物を見させて頂きました。彼らが成してきた事が今ある時代と感じています。

何も出来ないですが、いつまでもこういった資料館が残され、続かれることを祈ります。

ありがとうございます。

令和五年五月

静岡県焼津市

白鳥様

貴重な資料を見せて頂き有難うございました。とても心が痛みます。

何かボランティアでお手伝い出来る事がございましたら、ご連絡下さい。

令和五年五月

千葉県佐倉市

横山様

むかし、どんな状況だったかよくわかった。

令和五年五月

千葉県八街市

れい様(八歳)

当時の人の大変さや辛さが



よく分かりました。私たちは今十五歳で入れる時ですが、もし入っていたらとても大変なんだと思います。

命を大切にします…。

令和五年五月

住所不詳

長谷川様・水谷様(中学生)

遺影に囲まれて「しっかりとせい」と叱咤されているように感じました。国を思い、家族を思い、残りの人生もう少し頑張ろうと思いました。

令和五年五月

住所不詳

山本様

色々な人の写真があつて、こんなに多くの人が戦争に出ているんだと実感した。飛行機の模型がかっこよかった。

自分たちと同じくらいの年

齢から戦争の訓練をして、二

十歳前後の若い年齢で戦争に

出ていった人が多くいること

がすごいというか、信じられ

なかつた。一人一人のこと

について、とても詳しく詳細が

書かれていて分かりやすかつた。特攻隊の人達の親に向けての最後の手紙は、とても切なく、悲しかった。昔の人に感謝。

令和五年五月

住所不詳

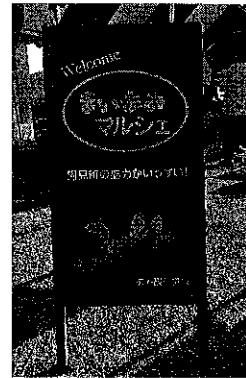
日野様(中学生)

(公財)海原会寄付者芳名簿

敬称略(単位付)

- 一〇 竹前 正一(乙19)長野
  - 二〇 磯貝 孝子(一般)神奈川
  - 五 小林 昭三(乙24)山梨
  - 五 成毛 勝義(乙20)千葉
  - 五 田代 芳広(一般)東京
  - 五 猪股 武溥(乙6遺)茨城
  - 一〇 原高 淳子(一般)東京
  - 五 宮下 久代(乙8遺)埼玉
  - 五 ヤリタセイゴ(非会員)不明
  - 一〇 鈴木陽一郎(甲8遺)長野
  - 一 大竹友佳理(非貧)神奈川
  - 五 大野 敏明(一般)茨城
- 海原会へのご芳志  
誠に有難うございました。

まいあみマルシェ支援



令和五年十一月四日、秋晴れのもと、予科練平和記念館周辺で「まいあみマルシェ」(通称れんこんマルシェ)が開催され、朝取れの地元野菜



や様々な地元の商品が販売されるなか、阿見町観光ガイドが主催する雄翔園・雄翔館の案内が開催され、今回初めて霞ヶ浦高等学校ボランティア同好会の生徒さん九名による案内が行われました。



今回参加された生徒さんは、これまで数次にわたり事前の案内研修を、海原会の行方参与と平野事務局長から受けており、今回はその発表会のよくなものでした。彼らは、来

る十一月十二日の武器学校開設記念日にも、海原会が行う雄翔館の案内を担当して戴く予定になっており、更なる案内の充実が期待されます。



(山本元帥像の説明を行う生徒)



(雄翔館内の説明をする生徒)

予科練の事を何も知らなかった高校生が、この案内を通

して知るようになり興味を持って更に勉強を重ね、起爆剤となつて後輩に繋げて行つてもらえることを祈るような思いで支援させていただきました。

(事務局)

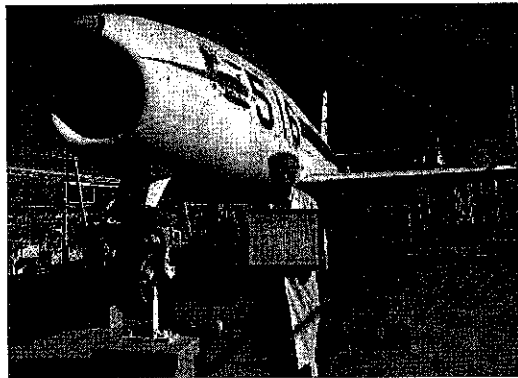
### 零戦実物模型製作開始

前理事長の菅野寛也氏（現名誉顧問）が小美玉市の（株）日本立体を訪問しました。



菅野氏が院長を務める菅野病院（静岡市）は屋上にF-86の実物が展示されていることで有名ですが、このたび院長を引退することとなり、

それを機会に新たに零戦の実物模型を製作し、私有地に建設予定の格納庫に、前述の2機を並べて展示し、一般にも公開の予定です。



その製作を担当するのが、予科練平和記念館に展示されている零戦を始め5機の実物大模型の製作実績のある（株）日本立体です。現在は、完成した飛燕が納品までの間保存されている同社の工場で、完成した機体を目の当たりにして、これから製作する零戦に

思いを巡らす菅野前理事長です。  
(事務局)



事務局日誌

九月九日

阿見町観光ガイド支援  
於 雄翔館等  
阿見町観光ガイドが実施する霞ヶ浦高校生徒のガイド研修会を平野理事、行方事務局次長が支援した。

十日

編集会議

於 Z O M 会議

塚編集委員長他、編集委員による編集会議を実施

十一日

雄翔館展示模様替

雄翔館整備担当の行方事務局長が、雄翔館展示

要領の一部模様替えを実施した。

十三日

雄翔館清掃

於 雄翔館

部外委託による雄翔館の清掃状況を平野事務局長が確認

十九日

学校長表敬訪問

於 武器学校

安井理事長及び平野事務局長が、星指学校長を表敬した。

二十日

三者会同

於 事務局

阿見町観光ガイド、予科練平和記念館、海原会による意見交換を行った。

二十日

評議員来所

於 事務局

評議員の巻島政美氏が業務状況視察のために来所

二十二日

武器学校 O B 会幹事会

於 武器学校

平野理事及び篠田理事が参加した。

十月

二日

告別式出席

於 うしく阿見斎場

安井理事長及び平野理事が、山下理事ご実母の告別式に出席した。

十八日

松村克弥監督来局

二十三日

特攻平和観音年次法要

於 世田谷山観音寺

星指副理事長及び平野理事が出席した。

二十五日

予科練平和記念館運営協議会

於 予科練平和記念館

平野理事が、阿見町から委員の委嘱を受け出席した。

二十八日

阿見町観光ガイド支援

於 雄翔館等

阿見町観光ガイドが実施する霞ヶ浦高校生徒のガイド研修会を平野事務局長が支援した。

十月

二十日

事務局

於 事務局

出席者・安井理事長、星指副理事長、平野理事、山下理事、塚理事、原監事、行方事務局次長

十一月

二十一日

下総航空基地記念行事

於 下総航空基地

原雅英監事が理事長代理で出席した。

申良航空基地追悼式

於 鹿屋市

平野理事が理事長代理で出席した。

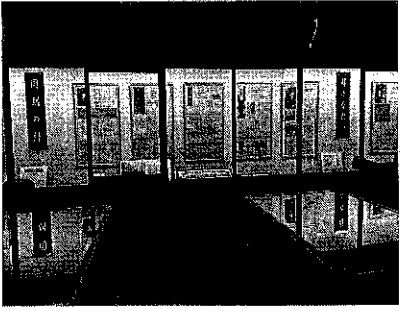
二十八日

阿見町観光ガイド支援

於 雄翔館等

阿見町観光ガイドが実施する霞ヶ浦高校生徒のガイド研修会を平野事務局長が支援した。

(展示のカテゴリー区分を明確にした)



十二日  
学校長雄翔館初度視察  
於 予科練平和記念館  
武器学校長が、予科練平和記念館及び雄翔館を見学した。

海原会会員の皆様へ

小さくてもあたたかい

# 家族葬

お葬式のご依頼や  
「もしものとき」に  
備えた事前のご相談  
年中無休で承ります

相談  
見積 **無料**

お客様満足度  
**99%**※

自宅葬、二日葬、お別れ会のほか、  
ご希望に合わせて  
お葬式プランがございます。

※当社施行客アンケート調べ

新型コロナウイルス感染拡大防止に万全を期しています。

## お墓

お墓のことなら何でもご相談ください。墓石工事は信頼の10年間の保証書付きです。

### 墓所工事

標準価格  
(10万円以上)の  
**10%割引**

サービス提供エリア:  
関東・関西・東海



「お墓のお引越しガイド  
& 事例集」

無料で資料を差し上げます。

## お葬式

葬儀一式をセット化した「葬儀式セットプラン」を各種ご用意。最適なプランをお選びいただけます。

### 葬儀

祭壇標準価格の

**20%割引**

※一部斎場、一部商品は除く。  
新花で送る家族葬は  
優待料金  
サービス提供エリア: 関東



「お葬式の流れが  
わかる100項目」

無料で資料を差し上げます。

## お仏壇

仏壇店は首都圏に2店舗(国分寺・千葉)。伝統型仏壇や家具調仏壇、手元供養商品まで豊富な品揃えです。

### 仏壇

店頭価格の

**25%割引**

※ただし、催事特価品と  
仏具小物、手元供養商品  
は対象外  
サービス提供エリア: 関東



「お仏壇カタログ」  
「特選 お位牌」

無料で資料を差し上げます。

お問い合わせは  
海原会事務局へ

# 029-886-5400

お問合せの際は、「予約練を見た」とお申し出ください。

MAO  
MEMORIAL ART OHNOYA



## メモリアルアートの大野屋

<http://www.ohnoya.co.jp>



「予約練」第480号1・2月号  
昭和53年7月26日第3種郵便物認可

令和6年1月1日発行 発行人 安井 剛  
(隔月奇数月1回1日発行) 編集人 塚 純一

発行所 〒

300-0301

公益財団法人 海原会  
茨城県稲敷郡阿見町青宿489番地1

(慎輝ビル3階)

郵便振替  
0014019154332  
00291886154332  
FAX ☎ 0291886154332

定価500円